

文学空間に〈聞こえない音〉を聞く授業の理論と実践

―「ボタンちゃん」「アイスキャンデー売り」「失はれる物語」―

大 國 眞 希

文学的な文章の意義のひとつは、チョムスキーらが指摘したような言語の創造性やヤコブソンらの詩的機能と分かちがたく結びついていることに由来する。そして、文学的な文章の特徴のひとつは、「〈ない〉をあらしめる」ところであろう。小説技法ではヴェルヌの「くも見ない」「くも見ない」と否定する世界旅行を想起させ、詩句では萩原朔太郎の「我の持たざるものは一切なり」もその一種にと数えられよう。また、映像表現では不可能な「窓のない部屋」「ドアのない部屋」などのように、「〈ない〉ということによって〈ない〉ものを存在させる記述も、その一例として連なる。また、文学的な文章によって創られた文学空間の更なる特徴として、「音」によって空間を生成する点も挙げられる。芥川龍之介の「かちかち山」（未定稿『芥川龍之介全集別冊』一九二八・二）を読んでみよう（註1）。

童話時代のうす明りの中に、一人の老人と一頭の兎とは、舌切雀のかすかな羽音を聞きながら、しづかに老人の妻の死をなげいてゐる。とほくに懶い響きを立ててゐるのは、鬼ヶ島に通ふ海の永久にくづれる事のない波であら

う。永久にくづれる事のない波は善悪の舟をめぐつて懶い子守唄をうたつてゐる。

(傍線引用者、以下同様)

「かちかち山」や「舌切雀」「浦島太郎」などの世界を〈音〉によって重ねて、次第に物語の空間が創られていく様をこの引用から堪能できる。このように、〈音〉は小説空間を生成する核なのだ。

以上のことを念頭に、本稿では、文学的な文章の重要な特徴でもある〈ない〉と〈音〉に注目し、特に文学空間に響く〈聞こえない音〉、〈届かない音〉はどのように体験でき、またその体験を共有できるかを、主に授業実践を通して考えてゆくことを目的とする。

一．届かない〈音〉、聞こえない〈音〉が響く文学空間

小川洋子は「死者や動物たちや草花たちの無言の声を言葉にする」姿勢を有していると表現してやまない作家である(註2)。彼女が小学校に入学してすぐに創作した話が原型になっていると推察できる(註3) 絵本「ボタンちゃん」(PHP研究所、二〇一五・一一)も、物、静物、観念的な意味での死者といった声なきものの〈声〉や〈音〉に耳を傾けることで生み出された物語だ。「ボタンちゃん」では、アンナちゃんという女の子のとおきブラウスについている、ボタンホールちゃんと仲良しのボタンちゃんが(中心的な視点人物ならぬ)中心的な視点物だ。あるとき、糸が切れて、ボタンちゃんは子ども部屋を転がっていく。そこで、アンナちゃんが赤ちゃんのときに握っていたガラガラや、いまやくしゃくしゃに丸まったよだれかけや耳の半分とれたホッキョクグマが、おもちや箱の裏やベッドの下で泣いているのに出会い、声をかけ、話を聞いてあげる。その後、帰還するも、最後に

はボタンちゃんが付いているブラウスをもアンナちゃんは着られなくなる。そこで、ボタンちゃんは「思い出箱」にしまわれ、ガラガラたちと再会を果たす、という筋立てだ。物語は以下の一文で結ばれる。

ときどき、ガラガラが小さく、カシヤと鳴りますが、アンナちゃんの耳にはもうとどきません。

「カシヤと鳴ります」で止めず、アンナちゃんの耳にはもう届かないとしたことにより、〈文学的〉な味わいが深まっている。音は聞こえて初めて音として認識される。この〈音〉はアンナちゃんには聞こえない、存在しない音だ。しかし、その存在の可能性を孕んだ〈音〉こそが、作品空間に響き、読者の耳に（脳内に／心に）届く。この絵本の読み聞かせの眼目のひとつは、読者の耳にこの〈届かない音〉をいかに届かせられるのかにあると言えるだろう。聞こえない〈音〉が、逆説的ではあるが、聞こえないことよっていかに強く響くか、読者がその響きを感じとる体験をいかに印象深くするか、それが肝要である。

同様のことは立原えりかの「アイスクャンデー売り」についても言える。同作は、『おやじの値段』（文藝春秋、一九八七・八）に収められた小品で、三省堂『現代の国語新訂版Ⅰ』（一九九〇）、『現代の国語Ⅰ』（一九九三、一九九七、二〇〇二、二〇〇六）に採録されている。単元は「平和を願う」。

本作は、「私」が小学生の頃にやってきていたアイスクャンデー売りのことを回想する形式を有する。冒頭は以下の通り。

小学生のころの夏休み、午後三時になるとアイスクャンデー売りがやってきました。空き地の木かげに自転車をとめて、ちりんちりと鐘を鳴らすのがアイスクャンデー売りがきた合図です。

お客がいなくなると彼女はアイスキャンディーを地面に三本並べて置き、となりにしやがみこんで、しばらくじつとしてから立ち去るといふ奇妙な行動をする。後に空襲で子どもを三人失くしていたことが明らかとなる。跋文は「ちりんちりん」と鐘を鳴らしながら、心のいたみをおさえていたにちがいない女の人に、小学生たちが出会うことも、もうないでしょう」である。教科書に掲載される際に、「ちりんちりん」と鐘を鳴らしながら、心の痛みを抑えていたにちがいない女の人に、小学生たちが出会う夏は、二度とないようにと「思います」と文章が変えられており、この変更が「二度とないように」という直示的な、説明的な文章の機能を生かすものであり、文学的な文章においては原作のまま「もうない」とすべきであること、作者の平和の願いが「共感」をもって受け止められるか否かは、「ない」〈音〉をどのように深く受容するかにかかっており、それをするこゝろなくあらすじだけを理解して「戦争は悲惨だと思いました」や「平和は大切だと思いました」という感想が、「共感」を伴わず、外側の整合性だけを求めて発せられてしまうならば、それは本作を読んだ甲斐がなく（文学体験をしたことにはならず）、単元がもつめる「平和の願い」は果されず、発展学習としての「教材を通じて思いを伝える」ことにも繋がっていないのではないか、ということとは既に指摘した（註4）。

そこで、本稿では、この〈聞こえない音〉を聞くために〈文学サウンドマップ〉を利用した読みの実践をおこなった、その実践報告によって、〈音〉を聞く読み、文学体験の意義を考えてみたい。サウンドマップとは、白い紙の上に縦と横に交差する直線を引き、グラフを作成。縦軸と横軸の項目をそれぞれ自由に設定し、聞こえてくる音を視覚的に表現する図表で、元々ネイチャーゲームやサウンドエデュケーションなどの環境学習プログラムの一環として作成されていたものを、大庭照代・曾我部行子が簡単な記録方法でありながらも主観性と客観性とを併せもつ優れた環境評価ツールへと発展させた（註5）。〈文学サウンドマップ〉は、このサウンドマップから大國が着想した実践方法である（註6）。サウンドマップ同様に、白い画用紙にグラフを描く要領で縦軸と横軸を引き、それを

座標に文学空間において聞き取った〈音〉を写しとる。縦軸及び横軸の標題（項目）は記録者の任意に設定する。このようなサウンドマップは、〈音〉を受容する主体の感覚を客観的に提示できる特性をもつ。読者が小説空間に入りこみ、その場所で耳を澄ますこと、その時に聞いた〈音〉がどのようなものであったかを他者に客観的に示し、自分の感覚を精査し、考察し、深めていくことができる。

二 授業展開

人文学部（但し文学系を専攻しない）女子学生三〇名の授業において、「アイスクャンデー売り」を読む際に、〈文学サウンドマップ〉を使用した。一コマ九〇分の授業で、二次構成とした。まず、「アイスクャンデー売り」を読み、初読の感想を書いてもらうことから始めた。次に、結末にある「ちりんちりと鐘を鳴らしながら、心のいたみをおさえていたにちがいない女の人に、小学生が会おうことも、もうないでしょう」とある「ちりんちりん」の〈音〉がどのようなものであるか、絵画もしくは図表化する活動をおこなった（二次）。そして、学生たちが作成した絵画もしくは図表を共有した後、今度は、作品「アイスクャンデー売り」の中に響く音を、最初の「ちりんちりん」と一次の授業で絵画化した最後の「ちりんちりん」を中心にひろって、〈サウンドマップ〉を作成した。これらを四人の班に分かれて（何故そのような軸の項目を設定したのか、どのようなことが明らかになったのかなどを含めて）説明しあった。その後、改めて、本文を読み、どのような作品であるかを書き（その際には一旦すべての作業内容を消化し、気持ちフラットにして読むよう指示した）、そして、最後に自分の初読の感想と比較、どのような変化が見られるかを考察する活動を行った（二次）。

第一次 最後の「ちりんちりん」を絵画化・図表化する活動

九〇分の授業で、「アイスキャンデー売り」を読み、最後に示される「ちりんちりん」という鐘とはどのような音か、絵画や図表で表すよう指示した。その図が何を意味するか、他のひとが見てもわかるような説明を書き添えてもらった。その際に、あくまでも最後の〈音〉がどのような音であるかを絵画化、もしくは図表化するものであり、時系列で漫画のコマのようなものを書くのではなく、この〈音〉がどのように響いているのか、どのような〈音〉であるかを他人にわかるように書いてほしいと要望した。この図表化の活動は、本作に響く最後の鐘の音に特化したサウンドマップ（マップすなわち地図とは『広辞苑』に拠れば、「地表の諸物体・現象を、一定の約束に従って縮尺し、記号・文字を用いて平面上に表現した図」であり、久武哲也・長谷川孝治編『地図と文化』（地人書房、一九八九・四）が紹介するとおり、その形式や表現方法は多様に存在する）となることを念頭においた説明を心掛けた。学生たちが作成した図の例を以下に示す。



【図1】

【図1の説明】

ガラスを弾いたような音をイメージしました。左側上の黒く垂れているのが子どもの血、下の草が夏。右側上の白く垂れているのがアイスキャンデー。真ん中の丸いのがおばさんの心（ピンクとか青とか、アイスキャンデーの色）ガラス。その下の水滴が涙（血）。きつと鳴らすたびに心に血の涙を流したと思った。

亡くなった子ども達にできなかった分、他人の子どもにも優しくするの？）あと、この音を鳴らして来ることが、自分の



【図3】

【図3の説明】
私は「ちりんちりん」という音にこの女の人の3人の子どもが思い浮かんだ。自分の亡くなった子ども達に対してのさみしい気持ち、又、親として子どもが先に亡くなるという何とも言えない苦しい気持ちがこの音に隠れているのかなと思つた。そして、団地の子ども達に「ちりんちりん」と音を鳴らしてアイスクャンデーを売りに行くことで、少しでも苦しみから解放されようとしている？（自分が自分



【図2】

【図2の説明】
イメージは悲しさと虚しさを表現しています。普通ヒマワリは太陽を見つめているけれど、ここでのヒマワリは見えない↓現実（太陽）をみていないおばさん。うつぶいて花びらを落とすヒマワリ↓涙を落とすおばさん。または地面にアイスを置きつつけるおばさん。
太陽はおばさんの子どもが死んだという現実と元気な子どもたちを表現しています。



【図6】

【図6の説明】
アイスクャンデーを売っている女の人は、なにかやみが見えて、その人が来ると怖い気持ちかわくけれど、その怖さの中にアイスクャンデーを楽しみにしている「私」の気持ちを表現しました。



【図5】

【図5の説明】
アイスクャンデー売りの女の人を夏に咲くひまわりにたとえました。「ちりんちりん」という鐘の音は、とてもさびしそうで小さく消えていくようなイメージがしたので、花の葉が散るようすと結びつけました。また、ひまわりは、とても明るく元気のあるようなイメージがあるので、「心のいたみをおさえていた」の一文から、周りにはその姿を見せない様子を表現しています。



【図4】

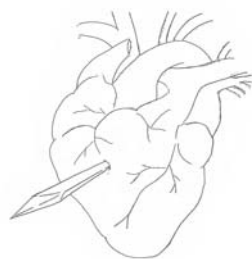
【図4の説明】
夏の日差しがカンカンと照っている大地の一角だけひんやりした空気が流れ、そこに大粒の涙を流しながら大空へ羽ばたいていく天使の、その涙の1粒1粒が地上に舞いおりていく、その1粒1粒の音のように感じました。



【図9】



【図8】



【図7】

【図7の説明】

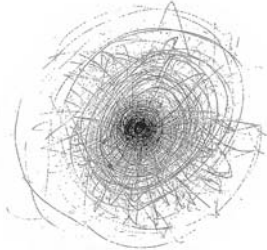
「ちりんちりん」はつめたくて、切ないイメージがした。でも、それだけではなく、そのつめたさの中に温かみもある。この音は、女の人の心の音だと思った。彼女の胸の痛み、心臓はあくくて、毎日力強く生きているんだけど、そこにはつめたい氷の矢がささっていて、それは痛いんだけど、心地良くもある。

【図8の説明】

夜の星⇨暗⇨アイスキャンデー売りの心。心はとても暗くて死んだ子どもに会えないか（会えるかもしれない）と期待している。星⇨輝き。もしかしたら死んだ子どもがかえってくれるのではないか（会えるかもしれない）と期待している。

【図9の説明】

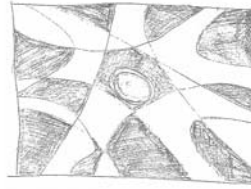
誰かが騒がしくしていたり、幸せにしていたりする陰で、少しの人にしか気づかれずにずっと「ちりんちりん」というイメージ。女の心の一部が欠けてしまっている。そうなので、花びらが一枚枯れている絵。女の人の存在感と花の存在感は少し似ている気がする。



【図12】

【図12の説明】

心の奥底にずっと残ってしまっただけ消えないイメージ。暗くてせつない「ちりんちりん」の音も小さく遠いところから聞こえる音。



【図11】

【図11の説明】

真ん中の渦が「ちりんちりん」の音色が広がっていく様子。



【図10】

【図10の説明】

アイスクャンデー売りの女の人が氷のかたまりに閉ざされた子ども達との思い出を持っていて。女の人の手は温かくて、アイスクャンデーを買いにくる子ども達への優しさもあるけど、冷たい氷をずっと持っているのは手が痛くなるので、その痛みが女の人の心の痛みを表している。



【図13】

【図13の説明】
アイスクリームの女性の心をあらわしていて、最後の「ちりんちりん」が最初思ったよりもかなしく、さみしい「ちりんちりん」にきこえたので、心の中でさみしい音が響いているのをイメージして書きました。



【図14】

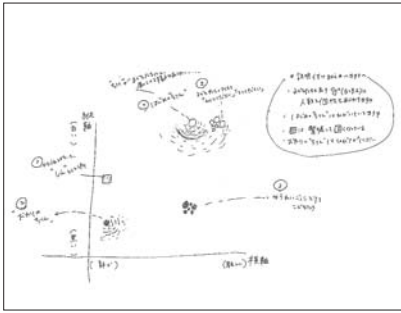
【図14の説明】
音は大きくて明るくて高い音だが、鐘を鳴らす「ちりんちりん」の間に間がある。その間があることで、暗い、悲しいイメージを持った。現在「ちりんちりん」の音を出している語り手はアイスクリームの心情が分かるので、よりいっそう悲しい気持ちを感じている。1回、1回鳴らすたびに子どものことを思い出しているために間をあけていると考える。

「心のいたみをおさえていたにちがいない女の人に」という箇所があるため、図4や図5、図7のように、アイスクリームの売りの心情を表現する学生が多く見られたが、心情に焦点をあてつつ、図1や図8や図10、図12のように空間の広がりや、温度、湿度を感じさせる絵もあり、また、その「女の人」の悲しい気持ちを受け止めている受け手の存在を意識して描いている図13、14などの例も見られる。どの学生の図も、音はどのように響いたのか、響いているのか、読み手の内部や、作品のなかの情景などを客観的に、と同時に臨場感や共感をもって、表現しようとしている様子が伝わってくる。

第二次 サウンドマップを作成する学習活動

第一次の活動でみんなが描いた図を見せ、各自で、その説明を読んだ。その後、サウンドマップの説明をした。

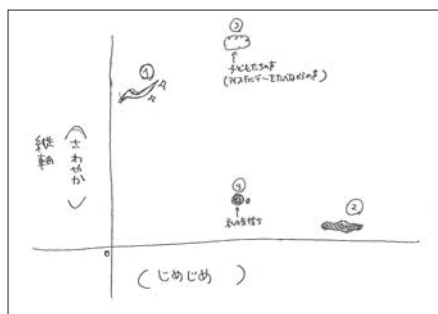
環境教育で自分がいる場所からどのような音が聞こえてくるかを示す図であること、自分が聞こえてくる周囲の音に耳を澄まし、その音を自分が作った座標のなかに書き込んでいくこと、である。そして、これと同じ作業を「アイスクャンデー売り」という小説でおこなうように指示した。特に、冒頭に登場する「ちりんちりん」と結末に登場する「ちりんちりん」に留意しながら、必要と思われる他の音も適宜書き込む。横軸を例えば時間軸にしない場合は、当然だが、筋の流れ通り（絵巻もののように）にはならないし、なる必要がないことも補足説明した。そして、四五分程をつかって、サウンドマップを作成した。その際に図表の説明を書き添えるように指示した。以下、学生たちが作成したサウンドマップの例を示す。



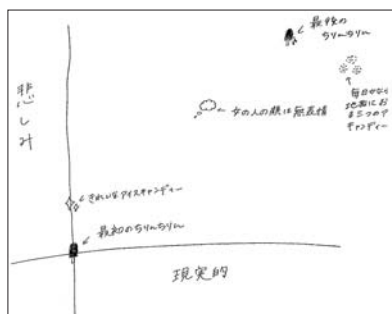
【図A】

【図Aの説明】

子ども達を表す○◇△：（白と黒色）は人数と個性を表すカタチ。はじめの「ちりん」はひびいているカタチ。■は緊張して固くなっている。おわりの「ちりん」はひびきがにぶい。（縦軸の）白―黒で、音の重さや軽さ、場面の印象、明るい、暗いをあらわした。（横軸の）静―騒で、音の響きかたをあらわした。



【図C】



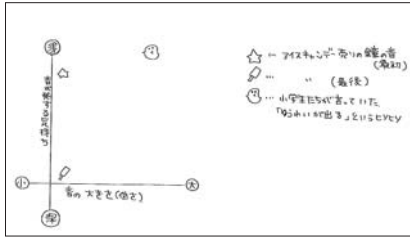
【図B】

【図Bの説明】

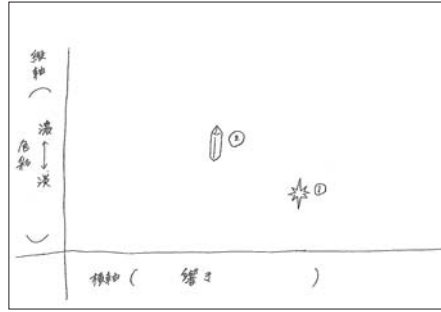
私は縦軸に悲しみを、横軸に現実的という項目をもってきた。なぜなら、最初と最後の「ちりんちりん」を考えてみると、悲しみの度合いが大きくなっていると感じたからと、この悲しみが生まれた原因を考えたら、現実を見るか否かだと思ったから。

【図Cの説明】

縦軸（さわやか）、横軸（じめじめ）。①一回目の「ちりんちりん」は比較的明るい（さわやかな音）イメージ。「アイス売りにきたよー、おいでー」的な意味の「ちりんちりん」。②二回目の「ちりんちりん」暗いイメージ。↓（じめじめな気持ち）もう子どもとは会えないと自覚したから、気持ちがじめじめ。③子どもたちの声。↓とても明るい。（さわやか度高め）。おいしく食べて、楽しんでる様子。じめじめ度半分。（すべての子どもがアイスキャンデーを食べられていないと思う。お金がなくて買えないとか。）④あの時アイスキャンデーかと思えばなーと思う↑後悔（じめじめ度高め）



【図E】



【図D】

【図Dの説明】

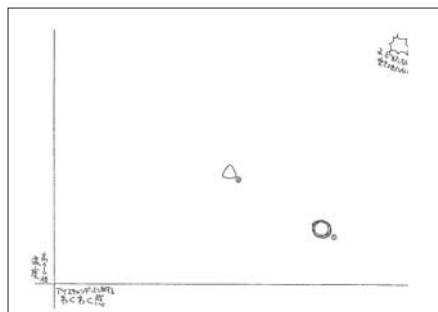
縦軸（色彩 濃↑↓淡）、横軸（響き）。①は純粹な鐘の音で、子どもらによく響きわたる。色彩も濃いというよりは、空の音とか夏の爽やかさから淡いイメージがある。音がキラキラ輝いている感じ。②は、キラキラというよりは、もっと鉱質的^{マツ}で、かたい感じ。響きも①のように全体に響きわたるのではなくて、「私」とか、誰かの心に響くというイメージがある。色彩はとても濃いというわけではなくて、子どもをなくした辛さとか、子どものことを思い出したときの心のあたたかみとか、いろいろなのが混ざり合って、①よりも色が濃いイメージがある。

【図Eの説明】

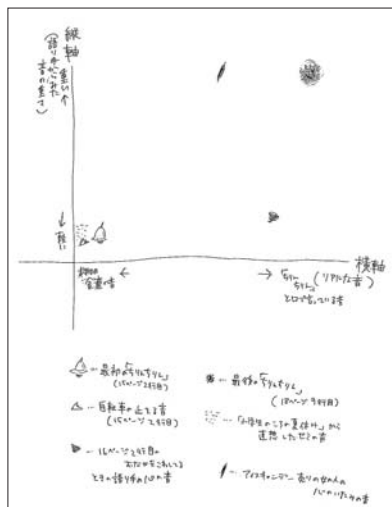
縦軸（音が発する気持ち）、横軸（大きさ（低さ）。星の形：最初のアイスクャンデー売りの鐘の音。アイスキャンデーの形：最後のアイスクャンデー売りの鐘の音。お化けの形：小学生たちが言っていた「ゆうれいが出る」というヒソヒソ。

【図Fの説明】

縦軸（語り手からみた音の重さ 重い↑↓軽い）、横軸（リアルな音 本物の鐘の音↑↓「ちりちりん」と口で言っている音）。「リアルな音」というのは、



【図G】



【図F】

そのまま本文を読んで、最初の音は本物の鐘の音がイメージできたが、最後の音は、語り手が言っている「ちりんちりん」という声のままのイメージが浮かんだから。「語り手からみた音の重さ」というのは、女の人は子どもをなくしていたという事情や来なくなった事実を知る前と後では音の重さが語り手からすると変わっていると思ったから。

【図Gの説明】

縦軸（温度 高↑低↓）、横軸（アイスキャンデーに対するわくわく感）。わくわく感はアイスキャンデーに対してのきもち。温度はその音が持っている温度。①最初の「ちりんちりん」は語り手が幼い頃に聞いていたアイスキャンデーを売りに来たときの合図。ふわっとしていて、涼しげな音。自分はアイスキャンデーを食べられないけど、食べたらいよいよ自分なるといふ思いで少し高めの高くわくわく感。②最後の「ちりんちりん」は、女性の過去を知って、少し柔らかさの取れた音。アイスキャンデーに対するわくわく感が消えたわけではないけれど、少ししんみり。ただの涼しげな音ではなくなって、「人」の体温がその音に混じってぬるくなった。③子どもたちが空き地にかける音は、おかねをにぎりしめて走ってくる子どもたちのドタドタと走る音。アイスキャンデーに対するわくわく感MAXで、子どもたちの高い体温と夏

の暑さで温度もすごく高い。元気な感じ。

サウンドマップでもまた、心情に関する項目を軸とする学生も多く見られたが、色彩や温度、湿度、明暗など、内面の感覚や作品空間を感じさせる項目を設定している学生も少なくなかった。

これらを踏まえながら、学生が書いた初読の感想とサウンドマップ後の感想の違いを読みながら、〈文学サウンドマップ〉の有効性について考えてみよう。

大きな変化が見られた点として、「アイスクャンデー売り」の女の人の心情について、より深く考えるようになった事が挙げられる。自身の変化について「アイスクャンデーを売りに来ていた女の人はどういう気持ちで売っていたのが「音」について考えたことで、以前よりわかったように思います」や「おばさんの気持ちが深くまで考えられるようになった」と直接的に書く学生もいた。学生Aの初読の感想は「なぜ、アイスクャンデー売りはとつぜん来なくなったが気になりました」というものであったが、サウンドマップ後は「アイスクャンデー売り」の心のいたみが伝わってきました。アイスを買いに来てる子どもたちと我が子を重ねていたのではないかと考えました。だからこそ、子どもたちから「ゆうれい」という言葉を告げられたとき、悲しいと同時に「いつまでも立ち止まっただけはいけない前に進もう」という気持ちになったのではないかと思いました。」と変わっている。その変化について学生自身は「初読のときに疑問に思っていたことに対しての答えを自分なりに考えることができたと思います。まだ、正しい答えはわからないけど、1つ1つの言葉や音、変化など小さいことに注目して読むことで、見えなかった部分を見つけて読みとることができました」と評価している。また学生Bはサウンドマップ後に「暑い子どもたちの夏休みに、冷たさを感じるアイスクャンデーを売っていたおばさん。売る時もずっと無表情でだまっただけで、おばさんの存在がアイスクャンデーに似ていると感じた」と書き、「初読の感想は子どもが無邪気さゆえ

に残酷な話だと思いました。おぼさんの表情などでは目を向けていませんでした」と振り返る。これらの記述から、表面的なあらずし理解ではなく、「暑い」「冷たい」などの身体感覚でもって、アイスキャンデー売りの表情に気付く学生の姿を見出せる。学生Cは「初め読んだ時はただちよっぴりかなしい話だと思っていたけれど、女の人の気持ちを考えながら文章の中にある音について自分なりに分析してみると、かなしいだけではなく、女の人が立ち直るための工程の文なのではと思うようになりました」と書いています。〈音〉を足がかりに、文章を分析し、アイスキャンデー売りの心情の展開を考えた様子が示されている。学生Dはサウンドマップ後に「ちりんちりん」と鳴らすたびにアイスキャンデー売りの心は痛かったのかもしいれない」と書き、その心情を分析した自身の変化に対し、「初読の時はおぼさんかわいそうという目でしか見てなかったけど、サウンドマップ後は、女の人の心情に着目した」と評価する。学生Fはサウンドマップ後に「今までアイスを渡す時も話さなかった女の人が、子どもの話をされると返事をした場面がとても印象に残りました」と書き、自身の変化について「初読の時はアイスのことがとても気になって切ない話だと思ったが、サウンドマップ後は、女の人の気持ちを考えて、最初何も気にならなかったところが印象的になってきているなと思った」と振り返る。学生Eは、初読では、「文章がですます調で一文が短く子どもが読みやすい」や「戦争のイメージが浮かぶ」などと書いていたが、サウンドマップ後には「アイスキャンデー売りの女の人はなぜアイスキャンデーを売り始めたのが気になった」と書き始め、売りに来なくなるに至る心情の変化をとらえ、自身の変化について「初読のときは文のつくりかたばかり見ていたが、今回は女の人の気持ちを考えながら読んだみたいです」と分析する。作品を外側から鑑賞するだけではなく、作品内部に入りこみ、アイスキャンデー売りの女の人の心情に寄り添う姿を見出すことができる。

次に、「私」から「女の人」への焦点の変化も見られた。学生Gは「はじめに読んだ時はアイスキャンデーを賣う子どもの立場から考えましたが、サウンドマップ後は、語り手とアイスキャンデー売りの女性の立場から考えた

など思いました」と書く。学生Hはサウンドマップ後に「頭を真っ白にして読んでみても、文の中の色や音が無意識に出てきて、アイスクャンデーへのワクワク感というか、人の心の痛みが伝わってきた」と書き、「最初読んだ時は最初に出てくる「私」が主人公でしたが、サウンドマップ後に読むと、自分の中で主人公は「アイスのおぼさん」に変わっていました」と記す。学生Iは「初読の時と比べると「私」や「アイスクャンデー売り」の気持ちに入り込めるようになったかなと思います」と書く。学生Jは、サウンドマップ後に「悲しみとか切なさとかだけでなく、あたたかみやわからさを感じられた。女の人が小学生らのことばで傷ついたのかどうか分からないけれど、あのシーンは親の愛があるなあと思った」と書き、自身の変化について「初読の時は小学生のこととくに目が行っていたけれど、改めて読むと、全体の温度？のようなものが感じられる気がして、このお話全部を「ちりんちりん」という音が包み込んでいるイメージがあった」と記す。この記述から、アイスクャンデー売りの女の人の心情を、作品空間の内部とその広がりを感じながら理解している様子が見える。

反対に、「女の人」から「私」への広がりも見られた。学生Kはサウンドマップ後に「何も考えずに本文を読むと、ただ単に「私」の「あーしとけばよかった」という後悔の文章に思えた。「私」が成長して、アイス売りのおぼさんの気持ちになっておぼさんを思っているなと思った」と書き、自身の変化について、「題名にもあるように、主人公はアイスクャンデー売りなのかと思っていたが、サウンドマップ後に読むと、「私」の気持ちなどから、「私」とアイスクャンデー売りの二人の話だと思った」としている。人物を単体で捉えるのではなく、関係性について目配りをし、それらが存在する空間への感触が垣間見られる。

そして、大切な変化として情景を具体的に体験するようになった点も挙げることができる。学生Mもサウンドマップ後に「なんだかその場の風景と共に音まで自分の頭や心に浮かんできて、まるで自分がこの物語の中にいるような気持ちになりました。アイスクャンデー売りの女の人の悲しみが痛いくらいに伝わってきました」と書いた。

学生Nは、初読では「たんたんとした印象を受けました」と書いていたが、サウンドマップ後は「語り手の女のは「アイスキャンデー」を「たべておけばよかった」と最後に言っていますが、それは「アイスキャンデー」を食べたかったというより、心のいたみをおさえたままの女の人から買って食べるアイスキャンデーが食べたかったんだらうと思いました。二度と叶うことはないからその後悔だと思いました」と書き、自身の変化について「最初はたんたんとした印象を受けました」と書いていたが、サウンドマップ後は「語り手の女のは「アイスキャンデー」を「たべておけばよかった」と最後に言っていますが、それは「アイスキャンデー」を食べたかったというより、心のいたみをおさえたままの女の人から買って食べるアイスキャンデーが食べたかったんだらうと思いました。二度と叶うことはないからその後悔だと思いました」と書き、自身の変化について「最初はたんたんとした印象を受けました」と書いていたが、サウンドマップ後は、後悔や心残りといった雰囲気を感じられず、より暗い物語のイメージが変わっていきまし」と書く。「そして、私が気になったのが、「ゆうれいになって会いにきてくれるといいんだけどね」というセリフを言った女の人の表情をみなさんはどのようにとらえるかという事です」と続ける。これらの記述から、やはりキャンデー売りの心情を単体で考えるのではなく、作品空間に入りこみ、語り手に寄り添い、自身の問題として捉えている様子が見える。学生Oもサウンドマップ後に「心のいたみをおさえていたにちがいない」女の人とは対照的に真夏の太陽とアイスキャンデーのキラキラとかがやいている様子は女の人も影をいっそう深めています」と書き、自身の変化について、「主観的に女の人を考えていたのが、少し客観的になっていっているのに、物語に入り込んでいる感じがしました」と評価する。作品全体を感じながら、なおかつ主観的に作品の中に入りこめるといふ、文学サウンドマップの特徴が生かされていることが窺える。学生Pはサウンドマップ後の感想として「女の人はちりんちりん」と鐘を鳴らしながら来るけれど、心の中は空っぽで、自分の鐘の音がすりぬけていってそうだなって思いました。鐘の音でやっと自分の存在を周りに知らせることが出来ているのではないのでしょうか。3人の子どものゆうれいに近い存在感のような気がしてしまいます」と書き、自身の変化について「最初は、女の人の存在だけが強く感じられて、物語全体が切ない気持ちでうまっている!と思うのですが、サウンドマップ後は、女の人を含めて、全体が無に近しいとか、空気のような話だなと感じました」と書く。小説空間を臨場感をもって捉え、自分の感覚でもって表現する様子も伝わる。「初読と変わったのは、音

を想像することで、本文から情景をイメージできたことです。暗い中にも人と人が暮らしていることがイメージで「きました」と書く学生もいた。

ほとんどの学生が生起する作品空間を、自身の感覚を生かしながら捉えようとしている様子を見てとることが可能である。また、それにより、結果ではなく、過程を大切にしている。「私」や「アイスキャンデー売り」の女人に情感を動かされながら寄り添いつつ、客観的にとらえ、それらを提示しあうことで、自分の読みや考えを深めている。

このような結果から、「アイスキャンデー売り」を読む授業においても、〈文学サウンドマップ〉を利用することの有効性が示された。〈音〉に注目することにより、自身の内部を総動員する主観的な受容でありながら、なおかつ、それが作品空間として生起される客観的な空間の生成でもある状況を体験することができる。

これらは、いわゆる「説明的な文章」ではなく、「文学的な文章」を読まなければ経験することができない言葉の交流の場である。大橋良介はこのような言葉を「場所としての言葉」と呼ぶ(註7)。「物語を語る語り手は、まずは「事柄の語り」に耳を傾けている。それは「世界―内―言語」と示される「いったん成立した」ものとはことなり、「世界―起―言語」と表しうる言葉であり、「聞く」ことよって初めて経験しうるのだ。この大橋の説明に従い、私達も小説空間に響く「世界―内―音」に耳を澄まさなければならぬ。

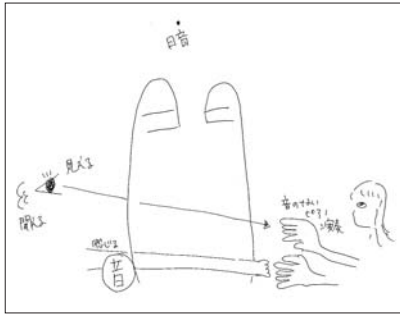
三 〈いまーここ〉にある〈主体〉

青嶋康文は、鷺田清一の教材「ふわふわ」(註8)を「インターネットやコンビニに依存したいまの消費社会の中で、『いま』という場所の感覚が消え」浮遊する自分について語った評論であると捉え、「鷺田の指摘するよう

な時代をいまの高校生は生きている」として、「主体性」を発揮する場面が少ない現代における、教材としての「舞姫」の価値を実践例と共に示している（註9）。また、加藤夢三は、量子力学による二〇世紀の大規模なパラダイムチェンジのなかで、唯一無二であったはずの「私」が抱く〈偶有性〉の感覚が現代人を貫くひとつの類型になっていると論じた（註10）。現代において「いま—ここ」にある〈主体〉をいかに実感し、確立（深化）しうるのか、文学や「国語」教育の現場においても、そのことを考える手がかりが求められている。そのためには量子力学的な知見を活用したSF的な小説を読むことが必須なわけではない。「私小説」的な小説でも、物理的に実際には鼓膜を打つわけではない（聞こえない）、視神経が刺激されるわけではない（見えない）、その意味で「前—テクノロジー」な活字の集積である小説の言葉の不可能性を利用して、小説空間が生起しつつある際の〈音〉（先の大橋の言を利用して言うならば、「世界—内—音」ならぬ「世界—起—音」と呼ぶべき〈音〉）に耳を傾けることによって、「いま—ここ」にある〈主体〉と向き合う読書体験は可能となるのではないだろうか。このことを考えるために最後に乙一の「失はれる物語」（註11）について触れておきたい。

「失はれる物語」は、齟齬をきたしはじめた夫婦生活を送っていたある日、夫が事故により、右腕の肘から先の感覚以外の感覚を全て失ってしまう話だ。音楽教師をしていた妻は、夫の腕を鍵盤に見立てて曲を奏できるようになる。そのため自然、「私」の存在する空間は〈濃い暗闇〉のように「闇」として示され、その際「音のない暗闇で」「光の刺さない深海よりも深い闇」のように「音、光と共に示されている。また、後半になるに従い、暗闇の静けさの表現が「音のない」から「無音」へと変化する。

光や音を利用せず、漢字表記に留意すれば門と音によってつくられる〈闇〉の空間を、「私」のいる闇の実体を、語ることは可能であろうか。闇そのものを描写することはどのように可能であろうか。



【参考図】

見ることも聞くことも出来なくなった「私」(夫)であったが、腕をピアノの鍵盤に見立てて演奏されているうちに「彼女の細い指が暗闇の向こう側に透けて見える」とあり、音のない演奏を通して、「私」は演奏を聞き、妻の姿を見るようになる。時が経つにつれ、「私」は妻の感情や状況を慮り、唯一動かさせた指を動かすことをやめる。やがて、妻は見舞いに訪れることがなくなり、「医師や看護婦にも存在を忘れられた」。末尾はこのように括られる。

永遠に失われた光景を夢みながら静かに暗闇へと身を委ねた。

この一文は、最後の「私」の動作で、〈暗闇〉そのものを感じさせる。「静かに」というのは、「音をたてることを回避する」意であるが、回避するというからには、そこに〈音〉はある。そして、「暗闇」へとその身を落とす。題名である「失はれる物語」とは引用箇所にある、闇の向こう側の「永遠に失われた光景」を指さない。これは「私」の物語なのだ。初出時の「失はれた物語」から「失はれる物語」と題名が変更されたことにより、その点がより明確になった(註12)。

【参考図】に描いたように、闇という漢字は門と音でできている。その門を挟んで向こう側に妻がいる。彼女は彼の腕でピアノを奏でる。物理的には弦によつて生み出されるピアノの〈音〉は響いていない。しかし、その〈音〉を媒介として「私」は向こう側に妻の姿が見え、ピアノの曲が聞こえる(聞(門+耳)、更に、聞(門+目)とでも表記したい)ようになる。「私」には感覚が戻っている。実際の世界での感覚ではないが、暗闇で感覚を持つことができるようになっていく。その「私」が最後に暗闇へと沈んでいく(失つていく)瞬間に立

てる〈音〉が「静かに」であり、この〈音〉によって読者は暗闇そのものの感触を、いままさに「失はれる物語」を味わうことができるのだ。

文学に響く輻輳的な〈音〉を自分の感覚でとらえ、それを客観性をもって説明することによって、より深い文学体験が可能となり、本質的な意味で「生きるための力」が鍛えられるのではないだろうか。文学における〈音〉の重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。

（註1） 大宰治スタディーズ二〇一五年一月例会の小澤純の発表「大宰治『お伽草紙』の周辺」に告示された。同氏の発表は、〈音〉に注目するものではなかったが多くの示唆を受けた。

（註2） 例えば、小川洋子・岡ノ谷一夫『言葉の誕生を科学する』（河出書房、二〇一一年・四）には「人間の示す称讚や思いやりが、言葉をもたないものたちの存在意義を深めていると思うのです。われわれが生み出したもの、まあ、それを仮に神とすれば、神もやはり言葉を持っていません。自分の意図を言葉では伝えられない存在です。そう考えると人間が生かされている世界は何と圧倒的な無言に支配されているのか、と思わされます。死者や動物や草花たちの無言の底に何が隠されているのか、人間は言葉を頼りに一生懸命探索し、記述しているのでしょうか。無言の重みにたえながら……」と発言している。そのほか、「ふと私は想像します。名前も知らないどこか遠い町にある、ひっそりした治療室で、傷つき途方に暮れた誰かが、迷い込んだ迷路の風景を語っている。たった一人うす暗がりに向かい、自分の言葉にどんな意味があるのかも分からないまま、ただ語り続ける。暗がりの奥に身を潜めた私は、それをひたすら書き取ってゆく。誰かの心を支えるために必要なその物語が、間違いなくこの世に存在していることを証明するため、一字一字丁寧に書き留めてゆく。それが、私の書く小説だ……」（小川洋子・河合隼雄『生きるとは、自分の物語をつくること』（新潮文庫、二〇一一年・二）との発言もある。

（註3） 小川洋子・平松洋子「行儀のわるい読書」（『coyoite』五七号、Winter、二〇一六）に「最初に作ったのは「迷子のボタンちゃん」というお話で、小学校に入学してすぐくらいでした」とある。

（註4） 拙稿「〈音〉と〈空間〉を読む「国語」教材の理論と実践」（『水月』一号、二〇一五・四）

（註5） 「サウンドマップで診る「人と自然の豊かなふれあい」（『日本サウンドスケープ協会二〇一〇年度研究発表講演論文集』二〇

- (註6) 二〇一四年八月一日～三日にかけて法政大学で開催された日本環境教育学会第二五回大会において「フィールドサウンドマップと文学サウンドマップの比較とその特性」として口頭発表をおこなった。また「文学サウンドマップ」をつかった教育方法の可能性―芥川龍之介「ピアノ」を対象とした授業を例に挙げて―を「水月」一号(二〇一五・四)に寄稿した。
- (註7) 大橋良介『聞くことの歴史―歴史の感性とその構造』(名古屋大学出版会、二〇〇五・五)
- (註8) 『精選現代文学』(筑摩書店、二〇一四)
- (註9) 「教室を思考の場に」〔月刊国語教育〕五二五号、二〇一六・一)
- (註10) 全国国語国文学会第一一回大会発表「偶然」から「偶有」へ―東浩紀『クオインタム・ファミリーズ』論
- (註11) 乙一『失はれる物語』(角川書店、二〇〇三・一一)
- (註12) 乙一『さみしさの周波数』(スニーカー文庫、二〇〇二・一二) 所収時は「失はれた物語」であったが、「失はれる物語」と改名され、『失はれる物語』に収められた。『失はれる物語』に収められた他の作品にも重要な箇所で行くつかの本文異同が見られる。

※本研究はJSPS科研費10435240の助成を受けています。